

基調講演

テーマ「作業療法士とのパートナーシップ」

私が理学療法士としてのキャリアを開始してすぐ、こんな出来事がありました。私が歩行、ROM エクササイズなどを行った直後、一緒に担当していた作業療法士が再び、歩行、ROM エクササイズを行っていたのです。自分の技術が不足しているからか？と悩みましたが、そもそも、「理学療法士、作業療法士、違う職種なのに、なぜ同じようなことをやっているのだろう？」率直に感じた疑問でした。

私は、まずは作業療法士がどういう職種なのかを知ることが必要と考え、書店に駆け込み、作業療法に関する書籍を読みふけりました。本当の意味での「作業」という言葉の深さと、作業療法の素晴らしさを知りました。それまで、大変恐縮ですが、「手芸をする人」、「更衣やトイレ動作をみる人」という認識しかなかった私にとっては衝撃でした。

そして、本来の意味での「リハビリテーション」の概念の中で「作業療法」は階層的にも、範囲的にも非常に多くの部分をカバーするものであると、学びました。「理学療法」はあくまで「医学モデル、回復モデル」「要素還元的」な色彩を多く含む職域であると感じるようになりました。

以後、「理学療法は最大限の医学モデル的な回復・改善を導き、作業療法は対象者の「作業」の実現をサポート、マネジメントする」というパートナーシップに基づく協業が対象者の「リハビリテーション」を支援するためのあるべき姿である、という結論に達し、1スタッフであった時はまず自分の影響の範囲で、主任となった時、新病棟の立ち上げを行った時、科長となってから、それぞれの段階で協業の実現に尽力してきました。

その中で実感してきたことは、リハビリテーション部門責任者として、作業療法士に「作業療法」に取り組んでほしい、という思いを伝えても、それぞれの立場、事情で、「作業療法」を行うことが難しい作業療法士がいらっしゃる、ということです。また、最も近くでパートナーシップを組むことの多いわれわれ理学療法士が、「作業療法」について理解することがとても重要である、ということです。

私がこれまで「作業療法」を行える職場づくりのために行ってきたこと、理学療法士をはじめ他職種からみた作業療法に対するイメージや期待などについて、紹介させていただく予定です。

昨今、多様な考え方がございますが、もし「作業療法」を行うことに躊躇したり、不安を覚える作業療法士の方がいらっしゃるのであれば、対象者の「リハビリテーション」を支援するという志を共にする仲間として、背中を押せる機会になれば幸いです。

伴 佳生

永寿総合病院柳橋分院
リハビリテーション科科長
理学療法士

